



HAL
open science

Nichi-ryū sogo (日琉祖語)

Thomas Pellard

► **To cite this version:**

Thomas Pellard. Nichi-ryū sogo (日琉祖語). Kibe, Nobuko (木部 暢子). Meikai hōgengaku jiten (明解方言学辞典) [The Sanseido dictionary of dialectology], Sanseidō, pp.113, 2019, 978-4-385-13579-3. <hal-02099262v1>

HAL Id: hal-02099262

<https://hal.science/hal-02099262v1>

Submitted on 14 Mar 2020 (v1), last revised 1 May 2020 (v2)

HAL is a multi-disciplinary open access archive for the deposit and dissemination of scientific research documents, whether they are published or not. The documents may come from teaching and research institutions in France or abroad, or from public or private research centers.

L'archive ouverte pluridisciplinaire HAL, est destinée au dépôt et à la diffusion de documents scientifiques de niveau recherche, publiés ou non, émanant des établissements d'enseignement et de recherche français ou étrangers, des laboratoires publics ou privés.

日琉祖語

(にちりゅうそご) proto-Japonic, proto-Japanese-Ryukyuan

Thomas Pellard

日琉語族を形成する日本本土および琉球列島の諸言語が分岐する以前の共通祖先の言語。比較方法によって再建される。以前「日本祖語」と呼ばれていたが、琉球諸語を排除した「日本（本土）祖語」と区別するために近年広まりつつある用語である。

分岐の過程と年代

日琉祖語は文字通り本土日本語派と琉球語派とにまず分かれたと思われるが、琉球諸語が日琉祖語から直接ではなく九州諸方言から二次的に分岐したという仮説もある。さらに八丈島の言語は本土の方言と共通する新しい面も示しながら古い特徴もいくつも保持しており、その史的な位置が定かではない。

一方、琉球諸語と八丈語は「古事記」や「万葉集」など、日本語の最古の文献資料で見られない音韻の区別を示しており、それらが二次的に発達した改新と説明できず、祖語に存在していた区別の保持と考えられる。つまり、それらの区別が奈良時代の日本語ではすでに消えており、日本語と琉球諸語が分かれたのは奈良時代以前であると言える。このように下限を特定できるが、上限やそれより詳しい年代推定は言語学からはできない。ただし、考古学などの他分野の資料から見て、日琉祖語は社会の大きな変動が起こった弥生時代末期なし古墳時代あたりに分岐した可能性が高い。琉球諸島の現代住民の直接の祖先が平安時代になってから琉球列島に移住したという有力な仮説と一見矛盾するように見えるが、琉球諸語が分岐してからその話し手がすぐに南下したのではなくしばらく本土（恐らく九州地方）に在住していたと想定すれば解決される。

体系

日琉祖語には *p・*t・*k・*Np・*Nt・*Ng・*m・*n・*s・*Ns・*r・*w・*j の 12 子音があったと考えられる。*Np・*Nt・*Ng、*Ns は前鼻音化子音で濁音の祖形である。ワ行子音とヤ行子音が接近音 (*w・*j) ではなく破裂音 (*b・*d) であったとする説もあるが、その根拠が不十分で問題点も多い。

母音は従来考えられていた *a・*i・*u・*ə のほかに琉球諸語の資料から *e・*o を加えて 7 母音体系が再建される。*e は上代日本語の甲類のイ列音、*o はウ列音に対応するが、それぞれ甲類のエ列音とオ列音に対応する場合もあり、条件がまだ完全に分かっていない。また、*ai (上代語の乙類エ列音に対応)・*ai・*oi・*ui (上代語の乙類イ列音に対応) のような二重母音も再建される。

アクセントに関しては琉球諸語との比較から、今まで平安時代の声点資料と現代本土諸方言との比較によって再建されてきた体系より多くのアクセント型を再建する必要がある。たとえば 2 拍名詞のアクセント類 5 つではなく 8 つであった可能性が高い。

日琉祖語の文法体系に関する研究は音韻に比べて数が少ない。琉球諸語の動詞活用形の多くが「～しおる」という補助動詞構文に由来し直接日本語の活用形と比較できないという問題のほかに、日本語の文法形式の中に対応する琉球諸語の形式のないものもたくさんあるという問題もある。

文献

服部四郎. 1999. 『日本語の系統』東京：岩波書店.

平子達也・Pellard, Thomas. 2013. 「八丈語の古さと新しさ」木部暢子 (編) 『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究：八丈方言調査報告書』47-67. 立川：国立国語研究所.

Pellard, Thomas. 2013. 「日本列島の言語の多様性：琉球諸語を中心に」田窪行則 (編) 『琉球列島の言語と文化：その記録と継承』81-92. 東京：くろしお出版.

Pellard, Thomas. 2016. 「日琉祖語の分岐年代」田窪行則・ホイットマン ジョン・平子達也 (編) 『琉球諸語と古代日本語：日琉祖語の再建に向けて』99-124. 東京：くろしお出版.